

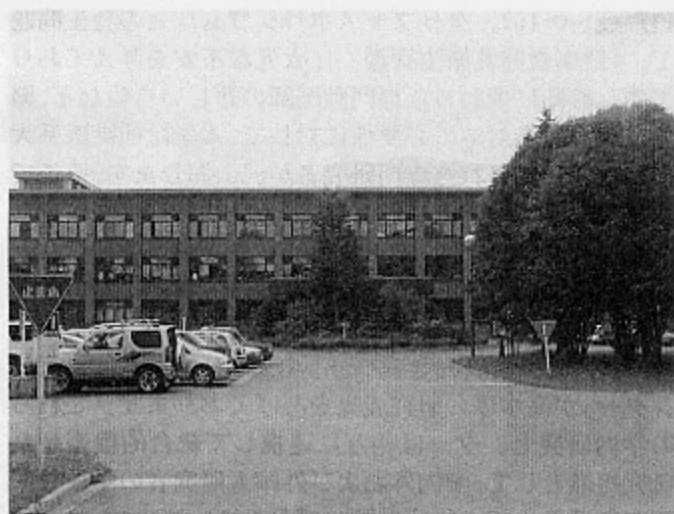
# 帯広畜産大学同窓会報

第9号 平成14年8月 帯広市稲田町西2線11番地 帯広畜産大学内 帯広畜産大学同窓会事務局発行

写真で紹介する母校帯広畜産大学



本部棟前並木道



総合研究棟-1号館



総合研究棟-2号館



新事務局長

厚谷 彰雄

同窓生の皆様、初めまして、平成14年1月に着任しました厚谷でございます。帯広市出身で、このたび戻って参りました。大学はただ今激動期にあります。微力ながら帯広畜産大学のために精一杯尽す所存でございます。どうかよろしく願いいたします。

第9号発刊によせて

会長 高田 薫 (S31 総農)



構造改革、教育改革など、改革の荒波に社会全体が揉まれている昨今ですが、会員の皆様にはご健勝にてご活躍のこととお慶び申し上げます。

私こと、昨年10月の総会にて、前任吉川睦夫会長よりその任を受け継ぐことになりました。もとより非力でありますので、会員の皆様の力強いご指導、ご協力をいただきながら、母校同窓会の発展に全力を傾注する決意でありますので、どうぞよろしく願い申し上げます。

母校は、昨年、創立 60 周年の節目を終え、21 世紀に向けて大きく羽撃こうとしています。60 周年を祝う記念事業には、多くの会員の方々からご協賛を頂き、式典当日には遠くブラジル支部をはじめ海外、全国各地からご参加いただきました。また、旧教職員の方々のご出席も頂き、師弟、旧交を暖めると共に母校の一層の発展・充実への期待と支援の誓いを新に致しました。

記念事業の一つとして、大学構内に建立した「帯広畜産大学追遠歌碑」は、大学構内の施設・設備が一新された中で、昔を偲ぶ貴重な存在となりました。式典後の歌碑除幕式には、作詞者、作曲者のご出席をいただき、祝賀会の終わりは歌碑の前で参加者全員の感情あふれる声で追遠歌を歌い、別れを告げました。

さて、60 周年は人生では還暦ですが、大学にとっては「成人式」に例えられると思います。現在母校は、獣医学科の再編問題をはじめ、各大学に共通な課題、独立行政法人化、学生の多様化、ニーズの変化や研究の先端化等に取り組まれています。大学を取り巻く環境は、大きな変革期を迎えていると思います。

こうした中で母校は、むしろこの機をとらえ、将来構想検討委員会を設置するなど、21 世紀に大きく羽撃く大学を目指して研究協議をすすめています。すでに改革の一部、学科改組（獣医、畜産科学の 2 学科制）は今年度から実施され、2 学科 10 ユニットによる新しい教育システムがスタートしています。大学の取り組みに深い敬意と期待をいたしております。

同窓会は、昨年の総会の要請を踏まえ、役員および代議員の増員について協議し、新に副会長 3 名と代議員 10 名の増員を先の役員会、代議員会に諮りご承認いただきました。新体制を確立し、会の活動の一層の推進・充実に努める所存です。

会員の皆さんは、所属される職場、住まわれている地域社会でご活躍され、また同窓会活動につきましてもご協力頂いておりますことに感謝いたしております。今後とも、支部活動や職場、地域単位でのご活動を期待いたしております。併せてご活動の様子や提言、情報等同窓会（本部）にお寄せ頂くなどご指導ご協力をお願いいたしますと共に、会員の皆様のご活躍とご健勝を祈念申し上げます。

## 同窓生の皆様に

学長 鈴木 直義 (S30 獣医)

本年 1 月に帯広畜産大学に戻って参りました昭和 26 年酪農学科入学 = 昭和 30 年獣医学科卒業の鈴木直義です。日本の国立大学は、例外なく再編・統合と独立行政法人化の嵐と突風に見舞われております。過ぎ去るのは平成 16 年頃でしょう。去った後には、帯広畜産大学が残っていないような事が無いように、現在、教職員一同が一丸となって叡知を集め一つずつ実践に移しているところであります。

本学では今年度から 4 学科を獣医学科と畜産科学科の 2 学科に改組しました。その理由は幾つか在りますが、その一つに、大学は志し高い次代を背負う学生諸君の多様で個性的な希望を迎え入れるのに相応しい教育・研究



の環境を整えるためです。また、学部教育と研究組織を分離し、学部教育の運営は学部教育センターが行い、他大学には真似の出来ない個性的な特徴ある専門職行教育ユニットを構築し、広い農畜産知識を有する専門人養成組織に改革しました。

研究組織面では、付属農場を廃止転換して「畜産フィールド科学センター」を設置し、本学農畜産・獣医分野の非疾病動物などの基盤研究教育の柱として発展することを期待しております。今、日本社会では、BSE、口蹄疫、O-157、クリプトスポリジウムなどの発生問題で、「健康食肉乳衛生管理」に大変な不安を与えております。診断に携わった専門獣医師の悲しい自殺など、緊急に専門組織対応の必要性に対して、本学は他獣医系大学に比較して優れた専門研究者が沢山おります。そこで、本年中に本学は学内措置として「大動物特殊疾病研究センター」を立ち上げ、BSE や O-157 などの基盤研究、とくに高度診断、予防、治療分野での研究推進に努力中であり、本学には、すでに獣医畜産系大学では日本で唯一の「原虫病研究センター」および「地域共同研究センター」が高水準の研究成果をあげております。これらの学内研究センターは相互に連携して総合的農畜産系研究組織として、学内外および外国人研究者の学術共同研究を活性化できればと願っております。

このように、獣医畜産系に特化された日本で唯一の職業専門家養成大学院大学として「動物性蛋白質資源の生産向上と食の安全確保」に対する職業専門人を育成し、社会に学術貢献する大学へ改革して行きたいと思っております。同窓生の皆様方の絶大なる御支援をお願い申し上げます。

## 牛海綿状脳症 (BSE) 専用検査室の創設

副学長 (総務・研究等担当) 佐々木 市夫

2000 年 3 月、我々畜産関係者を震撼させた 92 年ぶりの「口蹄疫」、そして 2001 年 9 月、わが国に初めて襲来した恐るべき牛海綿状脳症 (BSE)。相次いで発生したこれら特殊疾病は消費者に大きな不安を募らせ、生産者に深刻な動揺をもたらしています。「文明」がグローバル化する他方で、そのイデオロギーが色褪せて見える中、「家畜とは何か」、「安全とは何か」という大きな課題が



我々に突きつけられました。この事態は、近代社会における畜産の技術や制度、さらには自然観・生活観へも見直しを迫る歴史的課題だといっても過言ではないのです。

このような歴史的課題に積極的にかかわり、社会に有効な提言を行っていくことは、国立唯一の畜産系単科大学たる本学の使命と考え、2001年10月に「帯広畜産大学牛海綿状脳症（狂牛病）対策プロジェクトチーム」を立ち上げました。本学の全ての分野を融合し一丸となり、また行政、農業団体、研究者、流通業者、消費者等と連携しつつ、家畜と畜産物の安全問題に全力で取り組んでいるところです。当面はつぎの7課題としました。

1. 病原体プリオンの検出方法と感染メカニズム
2. 病原体プリオンに対する治療や予防方法の開発
3. 国内飼料生産の安全性確保と品質向上の技術開発
4. 循環型畜産システムの技術と制度の開発
5. 諸外国の畜産物安全政策とわが国への導入
6. 牛海綿状脳症（BSE）の食肉消費に与える影響
7. 畜産物の安全性に関する消費者への継続的な情報提供活動

この一連の研究を進めるにあたって、既存の教育研究施設との併用は困難であることから、プロジェクトチームとして、1億円相当の大型特別機械設備（生体検査システム、高速高感度プリオン蛋白質画像解析システム）を文部科学省に要求していたところ、幸運にも認められました。完全に外部との接触を遮断する牛海綿状脳症（BSE）専用検査室が、この7月に着工、年末までには創設される予定です。これにより、一層効率的な検査・研究体制が確立し、この歴史的な課題への研究がますます促進され、21世紀の新畜産形成に大いに貢献できるものと確信します。

## 「大学の責任」

副学長（教務・学生等担当） 長澤 秀行（S53 獣医）  
大学における教育・研究活動を支えている「大学の自治」あるいは「学問の自由」は、大学の自立的価値判断による教育実践と学術研究を保障しています。しかし、「大学の自治」は大学に無条件で与えられた特権ではなく、社会が大学に期待して付託したものです。つまり、

大学に自治を与えることにより、社会的に有意と判断された機能が果たされることを社会が期待しているのです。

最近、大学評価・学位授与機構により、大学の教育研究活動の個性化や質的充実に向けた主体的な取組を支援・促進するという目的で、「教養教育」「教育サービス面における社会貢献」「研究活動における社会との連携及び協力」「国際的な連携及び交流活動」といったテーマで評価がおこなわれています。法人化後は、大学の中期目標・計画に対して自己点検評価をおこない報告することになります。大学評価・学位授与機構と文科省はそれぞれ教育・研究の評価と運営全体の達成度を評価し、大学運営予算に反映されることとなります。

評価結果は社会に公表されるので、大学の目標・計画やそれに対する達成度が明らかになり、予算配分の透明性も高まることが期待されます。大切な公費を戴くのですから、評価を受けるのは当然のことですが、予算獲得のために高い評価を意識した教育がおこなわれたり、客観的に評価しにくい研究が軽視されたりはしないかと危惧されます。また、評価基準や方法が曖昧なところもあり、公費の使い道がもっと不透明になる危険性も残っています。

今、大学は構造改革プラン、国立大学法人化、世界的教育研究拠点形成、産学連携の推進、第三者評価などの導入で、大きな転換期を迎えています。研究面で世界最高水準を目指す大学の組織を支援するための施策ですが、不透明な未来に備えて、いつ芽を出すか分からないような種子となる人材の育成や知的財産を、豊かに育むことも決しておろそかにしてはならないと思います。今一度、「大学の責任とは何か」を問い直し、同窓生の皆様のご期待を裏切らないよう、社会に高く評価されるような大学づくりに身を捧げたいと考えておりますので、ご支援のほど、よろしくお願い申し上げます。

## ☆ 学科などの近況 ☆

### 獣医学科の現状

獣医学科長 齋藤 篤志（S40 獣医）  
昨今の BSE 問題で本学獣医学科が全国に名をなした



ことは、多くの会員諸兄姉の記憶に新しいところですが、一連のBSE対応の中で公衆衛生獣医師としてご活躍されていた1人の同窓生が亡くなられましたことを御存知の方もおられると思います。ここに慎んで哀悼の意を表わします。

獣医学教育充実の一つの解決策として、獣医学部・学科の再編統合が叫ばれてかなりの時間が経過しましたが、獣医学教育充実の明確な解決策は出されておられません。その上、我が畜大丸は、大学の「独立法人化」と「遠山プラン」による国立大学の再編統合の嵐の中を航行しています。その渦中、平成13年末、畜大丸の船長であった佐々木康之前学長が任期半ばにして下船されました。そして、畜大丸は、平成14年1月に、新船長として本学同窓の鈴木直義本学名誉教授(S30V)を学長に迎えることとなりました。獣医学科は、新学長の方針にしたがい、全学的支援を受けて、如何にしたら帯広が単独で生き残れるかを模索しています。そのような中で、他学科から4名の教員定員をお貸し願う事ができ、特色ある獣医学教育の実現を目指して努力しています。

最後に、平成14年度の本学改革の一環として、獣医学科の研究室は大講座に改組されましたので概要をお知らせします。これまでの家畜解剖学教室と家畜生理学教室は、基礎獣医学講座となり、山田純三教授が講座主任になりました。家畜病理学教室と家畜薬理学教室は病態獣医学講座となり、西村昌数教授が講座主任になりました。家畜微生物学教室と獣医公衆衛生学教室は、応用獣医学講座となり、白幡敏一教授が講座主任です。臨床系の4つの研究室(家畜内科学教室、家畜外科学教室、家畜臨床繁殖学教室、獣医臨床放射線学教室)は、臨床獣医学講座となり、山田明夫教授が講座主任です。獣医学科の英文名称もSchool of Veterinary Medicineになりました。

## 畜産科学科紹介

畜産科学科長 松岡 栄 (S41 酪農)

卒業生の皆様には、地域で、職場で、そして家庭で、益々、お元気にご活躍のことと思います。

本学は、今年度、かつてない大規模な学科改組を行いました。これまでの畜産管理学、畜産環境科学、生物資

源科学の3学科と共通講座が一緒になって、畜産科学科という新しい学科に生まれ変わり、本学は、畜産科学科と獣医学科の2学科体制で新しくスタートすることになりました。

この学科は、入学定員210人、所属教員数約100人の大所帯です。組織としては、家畜生命科学(講座主任:荒井威吉教授)、食料生産科学(松岡 栄)、環境総合科学(土谷富士夫教授)の3つの大講座からなり、そのもとに、それぞれ3つ(家畜機能科学、細胞分子制御科学、人間科学)、4つ(家畜生産科学、植物生産科学、生産システム制御科学、農畜産経営科学)、4つ(環境生態学、地域環境工学、食料環境経済学、社会環境科学)の研究分野が配置されています。また、今回の改組では、教育体制も大きく変わりました。教育を「基盤教育」、「共通教育」、「展開教育」の3つのカテゴリーに分けています。「基盤教育」は、広い意味での教養教育で、「共通教育」は、学科や専門に関わらず、幅広い農畜産の基礎知識や体験を提供するもので、「展開教育」は、いわゆる専門教育です。畜産科学科には、「展開教育」として、家畜生命科学、家畜生産科学、畜産環境制御学、畜産食品科学、食料資源ビジネス、分子生命科学、植物生命科学、生態系環境科学、地域環境工学の9つの教育ユニットを設置し、2年生の後期(4期)にこの9つのユニットから自分の分野を選択することになっています。

旧学科体制は平成2年4月から始まりましたので、かなり長い間続きました。この間、3学科に所属された卒業生の皆様の中には、学科がなくなり、寂しく思われる方が少なくないものと思います。わが国の大学を取り巻く厳しい状況の中、今回の改組は帯広畜産大学飛躍の一つの試みとして、見守っていただければ幸いです。

## 新学科体制を構築して

畜産科学科環境総合講座

学科主任・講座主任 土谷 富士夫



畜産環境科学科の近況を述べます、3月末に菊地、藤巻、大友の3教授は定年退官されたことを報告します。そして、この4月に畜産環境科学科は、ひとつにまとめられ1学科「畜産科学科」となり発展解消されました。従来の改組と違って大きく再編統合され、教育と研究の

組織が分かれ、学部教育は基盤教育、共通教育、展開教育の3分野になりました。展開教育が従来の専門を主体とする教育で、獣医を含めた10教育ユニットで行われます。

研究室組織は、これとは別で従来の研究室とは多少異なる再編組織で、3大講座、「畜産生命学講座」、「食料生産学講座」「環境総合科学講座」となり、さらに11分野に分かれました。

卒業生の皆さんに大変分かりづらいので、旧畜産環境科学科はどうなったか説明します。ただし、1年生以外は旧学科に属し、大学院もまだ変更しておらず、学科も研究室の位置も従来どおりです。

新学科は3講座（従来の学科規模）になりました。畜産環境科学科に近いのは環境総合科学講座で、環境生態学、地域環境工学、食料環境経済学、社会環境学の4分野に分かれ30名の教員で構成されています。

環境生態学分野は旧生態系保護講座の教員、土地資源利用学講座の一部（土壌学）、草地学講座（緑地）、その他2人教員から構成されています。地域環境工学分野は土地資源利用学講座（開発土木、地学）から構成されています。食料環境経済学分野は畜産管理学科の資源資源経済学講座から移動しました。社会環境学分野は、旧共通講座（教養）の教育学、物理学、法学、心理学、社会学、ドイツ語1名で構成されています。

旧環境科学科の作物科学講座は「食料生産科学講座」の植物生産学分野に移動しました。これに草地学講座（草地生態、草地利用）が加わりました。生物生産システム工学講座は、「食料生産科学講座」の生産システム制御科学分野に移動しました。

極めて分かりにくいと思いますが、これからは教員の所属先は必ずしも固定的でなく、今後も刻々と替わる可能性が大きく、平成16年には国立大学から国立大学法人になる予定です。また、学部棟は総合研究棟1号館と改名し、全面的内部改築が南側と西側から始まりました。この約3年間で研究室の位置など大きく様変わりするので、卒業生の皆さんは驚くと思いますが、是非一度お立ち下さい。

## 生物資源科学専攻および関連する学部教育の現状

生物資源科学専攻主任 荒井 威吉



本学大学院畜産学研究科は平成6年4月に従来の6専攻から3専攻に改組され、その時に生物資源化学専攻ができました。生物資源科学専攻は平成13年4月に改称された名称ですから、卒業生各位には馴染みが薄いと思われます。本年4月から本学は研究組織と教育組織が分離され、研究組織は獣医学科と畜産科学科の2学科に統合されましたので、生物資源科学科はなくなりましたが、今後3年間は2年生から4年生までの在对学生に対する旧学科体制による教育が行われます。このように本学畜産学部は大幅な改組を行いました。大学院畜産学研究科は現状の組織体制で研究教育が行われています。

本学の研究組織の改組に伴い旧生物資源科学科の先生方の所属に変動があります。畜肉保蔵の3先生（三上、関川、島田）と食品・生物機能化学の1先生（小嶋）は食料生産科学講座の家畜生産科学分野に、食品工学の2先生（石橋、弘中）は同講座の生産システム制御科学分野に所属します。その他の先生方は畜産生命科学講座（3分野）の家畜機能科学分野（大家畜を中心とし、個体から細胞レベルまでの動物の生殖、代謝、泌乳などのメカニズムを解明し、乳生産・肥育等の食料生産などに貢献する）と、細胞分子制御科学分野（微生物・植物・動物の細胞内での情報伝達や物質合成と分解、遺伝子発現などの生命機能を分子レベルで研究し、農畜産から医学分野までに貢献する）の所属となりました。本講座の他の1つは人間科学分野（生命科学の進展が人間と自然、社会文化に与える影響を人文科学的に研究する）です。

本年度の入学生からは1～2年生で教養を学び、3年生から各教育ユニットで専門的な学問領域の教育を受けますが、卒業研究は希望する先生の下で行います。旧生物資源科学科の先生方は主として畜産食品科学ユニットか分子生命科学ユニットを担当します。両ユニットとも化学的素養を修得させ、食品産業、製造業、農薬・医薬産業などを中心とした専門的職業人の養成を目指しています。

## 別科（草地畜産専修）近況

別科主任 堀川 洋



別科の学生定員が30名に増加して、今年で26年目を

迎えました。同窓生総数は938名に達するまでになり、定員増以降の卒業生でみますと、7割近くが地元に戻り営農をしております。最近では学生の定員割れが続いておりますが、別科の教育目的が「農村社会の指導者となるべき農業後継者の育成」であることは今も変わりありません。

定員割れの原因としては、高卒者の四年制大学指向が強くなってきたこと、18歳人口の減少、また農業情勢の変化と別科自体の問題等が考えられます。さらに、これらの状況を背景にして、別科の存続が危ぶまれるかのような新聞報道がなされたことも影響しているのでしょう。農家の方から「別科はどうなるのですか？」という質問をしばしば受けます。このことから、同窓生の皆さんの不安な気持ちを伺い知ることができます。

しかし、「別科は、教育内容を改善しながら現状の組織として残す」ことが、今年の教授会で確認されております。この方針は、別科同窓生の活躍実績に基づいた地域の強い要望に応えたもので、2年間の集中教育の後に地元に戻ることのできる教育システムに対する地域の期待は今でも大きいと考えております。

本学別科は、実学を意識した畜産科学と、生きるための教養教育を包含させた全人教育を行うことを基本にしております。これは、農業知識や技術を優先的に修得させることを目的としている農業大学校と大きく異なるところです。

いよいよ2004年に本学も独立行政法人に移行しますが、今後は産業に直接貢献できる教育機関に変革することが強く求められています。その意味においても、これまでの別科の教育目標を生かしたより良い組織作りを推進していかなければなりません。OB諸氏や農業機関の強いご支援をお願いいたします。

## 国立大学法人化と附属図書館

附属図書館長 石橋 憲一 (S42 農化)



今年の4月より図書館長を努めておりますが、図書館業務の中に英文略語の多いことにとまどいを感じております。数例を挙げますと、ILL, DDC, NACSIS-CAT, OPACなどです。図書についているISBNがInternational Standard Book Numberの略で国際標準図書番号であることを知ったのも、4月以降のことです。

現在、国立大学は平成16年度実施予定の法人化への対応に迫られているところです。本学の場合、4つの専門部会を立ち上げ、来年度概算要求に間に合うように、多くの先生が尽力されております。図書館も例外ではありません。法人化後6年間の中期目標・計画の提出を求められており、教育への支援、電子図書館としての機能強化、サービス向上などを目標として掲げ、図書・電子ジャーナルの充実、開館時間の延長および開館日数の増加、学内外利用者へのサービスの向上などを計画とした(案)を作成しました。本学では今年度より、約2,000タイトルの電子ジャーナルを導入し、各研究室の端末から自由に洋雑誌を利用できるようになりました。以前は、図書館や研究室で多くの洋雑誌を購入していましたが、毎年の値上げに対処できずにタイトル数を大幅に減らした経緯があります。電子ジャーナルもこれと同じ道をたどるのではという危惧を抱く方が多いのも事実ですが、特に大学図書館は蔵書スペースの関係で、よりペーパーレス化の方向に進むことになると思われまます。最近では、大学図書館はもとより公共図書館の蔵書検索は各図書館のホームページを立ち上げ、OPAC(Online Public Access Catalog, オンライン目録)を利用することにより、必要とする図書の有無が容易に検索できるようになっておりますので、ぜひお試し下さい。6月下旬に鳥取市で開催された国立大学図書館協議会では電子ジャーナルや法人化に向けての取り組みなどが主要な議題でしたが、研究集会の中で京都大学総合人間学部図書館職員の方が読書推進活動について発表しており、その中で特に印象に残ったことは図書館の利用者はお客様であるということでした。図書館は教育への支援、サービスの向上など、大きく変わろうとしております。本学も競争的環境の中で個性あふれる大学を目指し、鋭意検討しておりますので、同窓の皆様のご支援とご協力をよろしくお願いいたします。

## 帯広畜産大学原虫病研究センターの新たな発展に向けて

原虫病研究センター長 五十嵐 郁男 (S52 獣医)



原虫病研究センターは、これまでの原虫病分子免疫研究センターを発展的に解消し、平成12年4月、新たに

全国共同利用施設として新設されました。研究分野は、ゲノム機能学、耐病性遺伝子工学、病態生理学（客員部門）、節足動物衛生工学、高度診断学、先端予防治療学の6分野に整備されました。これに伴う研究棟の増築工事が平成14年3月に完了し、現在、教官、ポストドク、研究生、大学院・学部学生、JICA「上級原虫病研究コース」研修員、他に獣医学科、東大、北大、北里大、動物衛生研究所からの共同研究員を加えると総勢70人の研究陣、3階立て3,000㎡の研究施設を擁する我が国の獣医・畜産系で唯一の全国共同利用施設となりました。

研究内容は、トキソプラズマ、ピロプラズマ、トリパノソーマ、クリプトスポリジウムを中心として、遺伝子解析、感染免疫機構の解明、新しい診断法、薬剤やワクチンの開発など基礎から応用面に渡り、将来の原虫の制圧に向けて総合的に進めています。また、増築を記念して、平成14年6月14、15日に「国際化時代における食の安全性の確保—新興・再興感染症、バイオテロリズム対策—」と題して国際シンポジウムの開催と施設および研究内容の一般市民への公開を行い、シンポジウムに招待したテキサスA&M大学獣医学部のワーグナー教授から、本研究センターは下記のように評価されました。「原虫病研究センターは宿主抵抗性、診断法の開発、ベクター制圧、ワクチン開発などに優れた研究成果を挙げている。また、数多くのJICA研修生、留学生を受け入れており、開発途上国の人材育成にも貢献している。今後、原虫病研究センターがアジア・環太平洋地域における原虫病研究の中心機関となり、また国際獣疫事務局や各国の大学や政府研究機関などとの連携により、国際的な研究連携ネットワークを確立することが望まれる」。今後この目標に向かって、更に研究を進めて行く予定であり、卒業生各位の益々のご理解とご支援、更に研究生、大学院としての研究参加をお願いいたします。

## 附属農場から畜産フィールド科学センターへ

畜産フィールド科学センター長 左 久

毎年、附属農場の近況をお知らせしておりましたが、今年から附属農場は大学の学科改組に伴って、畜産フィールド科学センターに改組いたしました。そこで、今回はどこがどう変わって「畜産フィールド科学センター」という長い名前の組織になったのかを説明いたします。名前の字数が増えたため看板がとても大きく目立っています。

全国の大学附属農場がそれぞれの大学で持っている演習林や牧場・水産実験所などと統合して新たな学問領域としての「フィールド科学」の教育と研究を行う拠点を形成して組織のスリム化と機能の充実を図るという構想が数年前から進んでいました。今回の改組はこのような全国的背景と本学での教育と研究体制の改革が後押しして行われました。

畜産大学の農場はセンター化により学部から教授1名を専任で移籍し、従来学科で運営していた精密圃場や機械実習研究施設、肥育牛舎、屠畜場及び食肉加工実習施設などの施設を統合しました。この改組ではいろいろなことが期待されています。その一つには、全新生に

作物栽培や搾乳など様々な実際の農業体験をさせて畜産大学にきた目的意識の高揚を目指す全学共通実習の実施があり、これには学部から30名の教員が兼任で協力しています。一方、研究活動は、BSE研究プロジェクトをはじめとする諸課題の学際プロジェクト研究やバイオガスプラントの研究例のような地域共同センターと連携して行う研究などフィールド科学センターの機能を活かした基盤研究の展開に期待が寄せられています。さらには、ふれあい牧場体験学習や公開講座の開設、JICA研修生の受け入れなどの地域および国際貢献などもこのセンターの活動として展開させています。

こうして従来の農場機能より多様な活動の展開が期待されるようになったため、学部から40名以上の先生方に兼任教員として協力していただく体制を作りました。学内の皆さんからは、カタカナが増えて格好をつけた顔の「畜産フィールド科学センター」というよりも馴染み顔の「農場」と呼ばれる方が多いのですが、気持ちは、従来の農場以上に学内外を問わずいろいろな方に様々な形で大いに利用していただくことを大切にしています。今まで以上に深いおつき合いをお願いいたします。

## 帯広畜産大学地域共同研究センター

センター長 岡本 明治 (S44 草地)



帯広畜産大学地域共同研究センターは、6年前に農学系の国立大学の中で最初に設置された学内共同教育研究施設です。本センターは社会に開かれた大学の窓口として産学官連携を積極的に推進することを目的に民間企業、地方公共団体等との共同研究や受託研究に関すること、学外の技術者に対する高度技術研修、技術相談、技術セミナー、講演会、研修会、特許取得の推進など知的財産に関する相談、さらに他大学や研究機関との連携機能を果たしております。地域共同研究センターとしての最大の活動は共同研究にあります。当センターが実施してきた共同研究の数は年毎に増加し、平成12年度には41件から平成13年度は81件に達し、教員(151名)当たりの共同研究数では全国一となりました。総件数においても筑波大学(教員数2187名)について25番目の実績となっております。当然ことながら、これらは全て技術相談をとおした共同研究契約であり、企業など

学外の皆様の帯広畜産大学への信頼と学内教員の地道な基礎研究の成果によるものであります。平成14年4月以降のセンターの現況は、専任教員の清水祥夫先生が教授に昇任され、昨年度からの西武久(昭和36年卒)産学官コーディネーター、事務の千枝さん、十勝圏振興機構より清水さん、それにセンター併任教授(16年3月迄)岡本の5名体制でがんばっております。卒業生の皆様、母校と共同研究をやってみませんか?

## 大動物特殊疾病研究センター

大動物特殊疾病研究センター長 白幡 敏一(S40獣医)



本センターは、大動物特殊疾病の診断・治療・予防法の確立と、食の安全性確保に関する多面的研究と技術支援を目的に、平成14年8月設置されました。生産現場や臨床獣医師の方々の要望に具体的に対応できる研究組織の緊急構築を最優先に考慮して立ち上げた学内施設です。そのため、学部と原虫病センターの多大なご理解とご支援を頂き、教員スタッフには兼担をお願いし、施設・設備面も既存のものを活用することになりました。近い将来、文科省から独立したセンターとして正式に認可され、人員、施設等の充実が計られるよう願っております。

本センターは、特殊疾病(プリオン病やウイルス病の発症機構の解明と予防・診断)、食品有害微生物(社会的影響力の高い細菌性疾患への対応と食品の安全確保)、薬効治療(特定疾病の治療法開発と食品の安全性評価)、大動物巡回診療(特殊疾病の疫学調査と研究成果の臨床応用)の4分野で構成されています。

グローバル化が進行するなか、人獣共通感染症の発生や輸入食品の汚染等、「食の安全」に係る事態は、生産者・消費者はもとより、本学関係者に対しても、緊急かつ重要な課題を提起しております。将に、ゼロからの出発になりますが、幸にして、配属された先生方は極めて有能、意欲も旺盛ですので、今後の活躍に期待したいと思っております。本センターの門出に際し、会員皆様のご厚情を賜りますようお願い申し上げます。

## 附属家畜病院の現在

家畜病院長代理 宮原 和郎(S53獣医)

現在の家畜病院の大半は1970年に建設された建物で



老朽化は否めませんが、外観は化粧直しによって比較的新しくなっています(写真1)。家畜病院は本学の特徴である大動物診療を念頭に置いて全国の国立大学では類を見ない1301㎡の広い施設として建設されましたが、さらに1984年には獣医臨床放射線学講座の新設に伴い、超音波浴治療室、大動物手術診療室、覚醒室および入院厩舎を組み込んだ家畜病院新館が建設され、新館2階の研究室部分を除く総床面積は1909㎡を有しています(写真2)。1970年当時としては画期的であった据置式の大動物用X線透視装置や油圧式大動物用手術台などは、現在は大動物X線診療車の後継車で1994年に導入された産業動物総合画像診断車(写真3)や改良された油圧式大動物用手術台に受け継がれています。

スタッフとしては、病院長には平成13年4月から臨床獣医学講座家畜内科学教室の更科孝夫教授が併任しており、病院専任教官は宮原教授と石川助教授がおり、このほか、家畜外科学教室の山田明夫教授、大星助教授、山岸助手、家畜内科学教室の更科教授、宇塚助教授、田辺助手、家畜臨床繁殖学教室の佐藤邦忠教授、宮澤助教授、高木助手、獣医臨床放射線学教室の佐藤基佳教授、山田一孝助教授、上野助手が日常診療を直接担当するほか、獣医学科全ての教官が兼任でサポート体制を取っています。事務職員は平成12年4月から一元化され、家畜病院専任の臨時職員としては金子事務補助員と鷲頭補助員の2名となっていますが、平成14年4月からは電子カルテシステムも導入されています。

小動物一般外来診療受付は月曜日から金曜日までの9:00~11:30ですが、小動物開業獣医師からの依頼症例や産業動物診療については、直接受け付けたスタッフが調整の上、対応しています。平成13年度の診療頭数は産業動物685頭、小動物1999頭の合計2684頭です。産業動物ではウルグアイラウンド以降日本の畜産情勢の変革に伴い、またBSEや口蹄疫の発生に伴って診療頭数は減少傾向にありましたが、プロファイルテストを含めた集団検診の導入と診療点数改正によって増加に転じています。小動物診療頭数においては若手教官の積極的な診療参画と共に、臨床教育へも配慮した診療室・処置室の改修(写真4)や、超音波カラードップラー装置などの導入によって着実に伸びつつあります。



## 札幌支部

会長・毛利 正秀 (獣医 S 28)



写真1; 家畜病院正面玄関

今後さらに、臨床教育の実践教育拠点として、また地域のセンター病院としての機能を明確にするため、老朽化し始めている診療施設・設備の更新を含めた診療体制の整備を行いたいと考えております。



写真2; 家畜病院 (右端; 家畜病院本館、右上; 家畜病院新館、家畜病院前駐車場と入院患畜用パドック)



写真3; 産業動物総合画像診断車

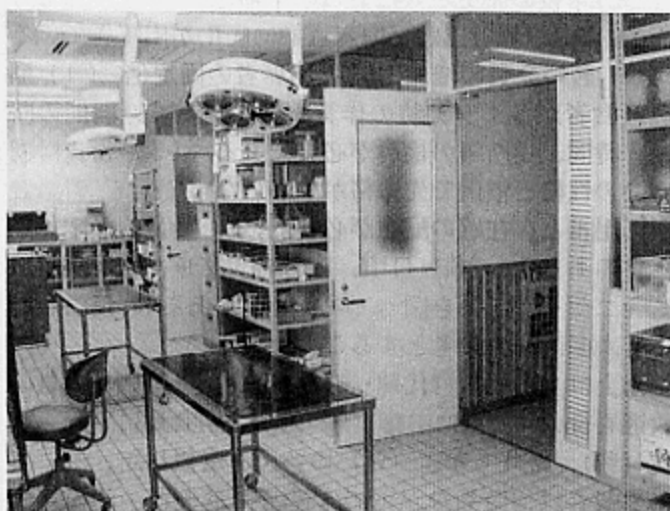


写真4; 診察室3室に続く処置室



我々の母校帯広畜産大学は昨年創立60周年の還暦を迎え教育研究の充実と歴史の重み加わって益々の隆盛を遂げております。先頃文部科学省が国立大学と民間企業などの共同研究の実績状況を発表しました。帯広畜大は北大に次いで道内第2位、生命科学の分野では高い評価を得て、全国でも上位にランクしている事は大いに賞讃されます。

さて札幌同窓会ですが予てより幹事会で計画しておりました新学長鈴木直義先生を囲む会を4月13日札幌市ホテルポールスターにて開催致しました。学長先生には新学期のお忙しい中、御来札をいただき30年卒業の同期、往年のラグビー部仲間達など、46名が参加し同窓初めての我等直さん、鈴木学長誕生を全員でお祝いし意義深い会でした。

新学長は帯広畜産大学をハイデルベルク大学に喩えられ、国立大学の独立行政法人化、再編統合、教育研究機能の活性化や近年問題のBSE、畜産食品などの対策にも触れ、帯広畜大の将来にベストを尽くして望みたいと力強い決意を述べられました。極めて困難な時、同窓生としては先生の舵取りに全幅の信頼を寄せ母校畜大の更なる発展を期待し応援してまいりたいと思っております。

札幌同窓会の総会は2年ごとの開催で、今年は予定していませんが本学同窓会との連携や来年の総会日程など今後の幹事会で検討を予定しております。

## 《江別同窓会について》

現在昭和40年卒業以上の江別市在住の40名で構成しています。去る、6月15日第8回の総会を開催し20名が出席しました。通常の議案の他、道交法改正に伴っての交通安全クイズや話題として新入会員を43年卒業以上を対象に勧誘したい、第10回の総会に記念行事で温泉地などの話が出ました。尚、江別同窓会旗は昨年度2名の物故者に捧げられましたがお互いの健康への認識を深め会って散会しました。

## 畜産大学同窓会十勝会の動向について

帯広畜産大学同窓十勝会会長 大石 和也 (S33 総農)



私は昨年12月8日の畜産大学同窓十勝会（以下同窓十勝会）の例会において、高田薫会長に代わり今期2年間会長に指名されました、大石和也であります。

私がこの同窓十勝会について紹介方々ご説明をさせていただきます。

この会は平成12年2月14日に結成され、会員1,800有余人の会員で構成されている会であり、会費は徴収せず必要な時にはその都度徴収することになっております。

青春時代を同じ学舎で過ごし、お互いにそれぞれの想いを残して社会に出たもの同士が相集り、親睦を深めるため酒を酌み交すことが大きな目的の一つです。もう一つの目的は母校帯広畜産大学の発展に寄与することです。

世の中がどんどん変わって参りました、我が母校にも大学の構造改革の波がまともにおしよせて参りました。時を同じくして獣医学科の再編統合問題も重なり、私達同窓生としては気持だけがあせって、何をどの様に支援できるか、内部でも種々話し合いがなされました。

本部同窓会も同じ様な悩みを抱えたようです。時間的背景にもよりますが、12月8日の例会は、多少いつもと異って参りました。

会長挨拶の直後に大学のあり方に関する意見交換会があり、山田獣医学科長と畜産環境科学科の倉持先生から、それぞれ畜大の将来方向についての意見を聞き、大変参考となった次第です。報告事項では、平成12年6月以降の役員会の報告、充実した幹事会の件で、各ブロック幹事の推薦により、100名以上の幹事会構成が報告された。

最後に役員改選が行われ、会長、副会長17名、筆頭副会長の決定、幹事長と事務局長の決定、監事、顧問の決定でしめくくった。

私は挨拶の中で、同窓会は大学と地域社会を結ぶ大きなパイプ役だと思ふと述べました。

帯広畜産大学発行の書籍の中に「帯広畜産大学の現状と課題」がある。平成5年発行の本には『地域社会との連携』は皆無に等しいが、平成11年発行の同書籍には

充分すぎるくらい取り上げられており、更にはその延長上に国際交流が来るとの考え方であります。

私は学校の組織や研究内容、その他評価などは解らないが、地域社会との連携については、私なりにまた同窓会としても力になれるのではないかと思います。

同窓十勝会を学校の地域社会との連携に大いに活用すべきと思うが如何なものか・・・。

## 釧路支部の現況

幹事長・伊織 正一 (S32 獣医)



釧路市及び釧路支庁管内を一円とする当支部会員(卒業生全てを会員扱い)数は131名で、内訳は、勤務会員81名、農業自営会員24名、それ以外の自由業と現職を退いた会員26名となっている。

隔年毎に開催している同窓会の総会と懇親会を、去る1月19日(18:00～)釧路市内パシフィックホテルで開催した。出席者は24名で、年々減少傾向にある。総会に先立つ役員会で、支部発生以来会長であった石澤友男氏(19V)の勇退の意向を踏まえ、後任会長の選考準備と、年々出席者の減少傾向の分析と今後の対策について協議し、次のように意見を集約した。

(1)学校の歴史と共に会員の年齢差が60才にもなり、面識、話題、親近感など同窓意識に変化が出てきている。

(2)若い会員の増加、(3)出席者の固定化、(4)酪農経営者が多く夕刻時の作業調整が難しく、開催の時期・時間、場所等の検討が必要である。(5)役員は同窓会の性格と慣例で先輩格が中心となっていて、若い会員の出番と存在感の配慮が必要だ。また役員の参加奨励不足もあった。(6)日頃、市町村、グループ単位でコミュニケーションを図っておく必要がある等、反省しながら次回開催の参考とすることとした。

総会は会長挨拶(代理・工藤副会長)に続いて役員改選を行い、会長に工藤 薫(20V)、副会長に平野 八代(留)、松井 孝志(新)の各氏を選任した。

懇親会は何時ものながらの常連メンバーと一部の新顔会員の参加もあって、楽しい一時を過ごし、予定時間を大きくオーバーして再開を誓い解散した。

『ご連絡下さい』

事務局及び連絡先を下記のようにしておりますので、

会員の転入・転出の届け出及び関係の方で当地方にお出での機会がございましたら、お寄り下さい。

## 秋田県支部便り

月澤 雄一 (S18 獣医)



先般、6月23日、平成14年度の支部総会を県南(横手市)の温泉で開催しました。

母校の創立60周年記念行事の状況なども報告し、いつものように和やかな懇親の場となりました。支部会員は総数45名ですが最近の目新しいことといえば、若い支部会員諸君が大いに開拓精神を発揮して活躍していることです。

去る6月初めのNHKテレビの全国版にも紹介されましたが、秋田市立大森山動物園生まれの幼キリンが右前肢骨折の為、世界ではじめての義足キリンがお目見えしたことで話題を呼びました。小松守園長(50V)をチーフに、三浦国哉(H9V)、高橋広志(H10V)の三人で骨折、即、瀕死の野生動物のパターンを何とか乗り越えようと、切断した右前肢の代わりに竹製義肢を考案し、園職員一丸となった延命作戦に取り組んだことは、訪れた子供達に命の大切さを教え、感動を与えたということで、地元テレビで連日放送されました。若い連中やってるな!という出来事でした。

支部総会で報告しましたが、畜大創立60周年記念式典や同窓会総会などの諸行事全体をとおして、ますます力強く、充実、発展していく母校の姿が見えてきました。この大学で学んだ誇りと懐かしい思い出が重なり、祝賀会の美酒が格別に旨かったことが記憶に残っております。60年の歳月が流れたとは思えなく、つい昨日のことのように思い出されるものがありました。

この頃では、例のBSE問題で、「最終診断は帯広畜産大学で」のニュースが出るたびに、心躍るものを覚えております。

最近、初代学長の宮脇富先生の「思い出すまま」の抜粋を読む機会がありました。その中に帯広高等獣医学校開学の裏話が書かれておりますが、地元の用地提供をはじめ、十勝管内からの多額の寄付や血のにじむような地元関係者の努力があったことなど、更に又、戦後の占領軍下の新教育制度や多くの荒波を経て今日に至ったことなどが語られており、興味深く拝読しました。

今日のわが国の大学改革で、再び揺れている母校を思うにつけ、我々同窓生、学生の青春の大地十勝から離れることなく、わが国の大食糧基地北海道のフィールドに密着した畜産学の殿堂として、更に誇り高く発展してもらいたいものと心から念願しているものであり、60周年を契機に、新世紀の日本の畜産をリードする大学に成長することを期待して己まない次第であります。

## 宮城県支部の活動状況

支部長・佐々木 敬功 (S34 獣医)

今年も梅雨明けが間近になってきた。先般、大学同窓会事務局より、「帯広畜産大学同窓会報」発刊に伴う本件支部の近況などについての執筆依頼があり、本会報発刊の精神「同窓会と会員相互の連絡を密にする」とありましたので支部近況をお届けします。

今年も3月2日[土]午後3時より支部総会に引き続き懇親会を開催しました。当支部の会員数は91名の大所帯になりました。名簿漏れの方も多分いると思いますのでもっと多くの人が所属するはずですよ。

しかし、出席者は予想に反し僅か19名でした、昨年の総会において時期、時間など吟味したつもりでしたが事務局の努力も空しく出席人数については非常に残念でした。

会の模様は、総会の儀式の後、全員近況報告と併せ、大学創立60周年記念式典に出席した方々より、その状況をつぶさに報告してもらい懇親会に移った。

懇親会の話題は、もっぱら新学長が初の畜産大学卒である鈴木直義氏に期待を寄せる話題で盛り上がり、そして、大学の統合、国立大学法人化への移行、獣医学科がどうなるか等々で終始した。何時ものことながら2時間半があつという間に過ぎた。その後も1時間ほど、お互いに杯を交しながら情報交換が続き、お互いの健闘と健康を誓い合いながらお開きとなった。

その間、会の運営上の話題として、もう一度開催時期の検討などを行うこととし、また総会ではなく、適当な時期に温泉にでもつかりながら親睦を深める機会を設けようではないかということになった。

どこの支部でも同じことかと思いますが、大学の歴史とともに年齢差が大きくなり、共通の話題や行動、さらには、共通の先生などがいなくなってきたこと、また、若い人は家庭や子供のための時間を大切にするようになってきたこと、趣味や遊びが多様化してきたことなどがあろうかと思いますが、畜大らしい義理、人情も大切な同窓会要素と思っています。

公私混同の支部近況となりましたが、次回の総会には多数の方々の参加をお待ちしております。

## 新潟県支部の現況

事務局・佐藤 将典 (S46 獣医)

新潟県支部では、昨年の12月1日に新潟市で同窓会を開催しました。出席者は会員それぞれの都合もあって10名と少なめでしたが、当日は本県獣医師会小動物臨床部会の研修会講師として来新された母校の広瀬恒夫名誉教授をお招きしました。

会は、昨年10月5～6日に開催された母校の創立60周年記念行事の報告が主な内容でした。本県支部からは7名が参加し、参加した五郎谷克二氏(獣医 S38)より式典、講演会、本県の名畑武男氏(獣専 S22)作詞の逍遙歌歌碑除幕式などの記念行事を撮影したスライド映写を交えて報告がありました。母校の様子をスライドで見た感想は、私が在学していた32～3年前とは比較にならないほど立派な建物が増え、校庭の樹木も成長していて、まるで違った大学のような感じを受けました。記念行事の報告後は恒例により会員相互の親睦を深めました。

最近の話題として、本県同窓会会長である小林悦夫氏(獣医 S32)が、今年3月、家畜伝染病予防法施行50周年記念の家畜衛生功労で農林水産大臣感謝状の表彰を受けました。また、本県岩室村で酪農経営されている藤田毅氏(酪農 S54)は、今年6月にジェラート店「ジェラテリア REGALO」を開店させ、昨今のBSEで沈滞気味の中、頑張っておられます。

終わりに、新聞等でも報道されていることですが、国立大学の独立行政法人化に伴う統合等の問題で、我等が母校帯広畜産大学の今後がどうなるのか、会員一同心配し見守っているところです。

## 関東同窓会の動向

関東同窓会会長・守田 貞公 (S28 獣医)

平成14年度帯広畜産大学関東同窓会は、平成14年6月22日(土)午後6時から、銀座ライオン7丁目店で行われました。この店で開くのはこれで3回目です。

総会は渡部憲嗣幹事長(S32 獣医)の司会で始まり、守田貞公会長(S28 獣医)の挨拶の後、議事(第1号議案:平成13年度事業及び決算報告の件、第2号議案:平成14年度事業計画(案)及び予算(案)の件及び第3号議案:役員改選の件)が諮られ、いずれも満場異議なく可決されました。今回の議案のうち、第3号議案:役員改選の件では、守田貞公会長が会長職を辞任し、後任に田中正三副会長が新たに会長に就任したほか、事務局の役員に若干の異動がありました。(別記のとおり)

続いて懇親会に移り、田中新会長の挨拶に続いて宮崎先輩(S18 獣医)の音頭とともに出席者が一斉に乾杯し、交歓の輪が広がっていきました。ちょうど7時になると、このライオン7丁目店独特のプロ歌手によるピアノ、クラリネット演奏を含んだコーラスのライブが始まりました。以前にも書きましたが、このコーラスグループのリーダーは、永江巖副会長(S23 化学)からむかし指導を受けたことがあるとのこと、今回も演奏時間の延長など大いにサービスして下さった様子です。

さて、今回の出席者は総勢51名で、例年からみるとかなり落ち込んでおり、主催者として申し訳なく思っております。同窓生に新旧間の断層があり、特に若い同窓生の出席が少ないことは以前からの問題でした。来年は田中正三副会長のもとに、多くの卒業生が集って下さることを期待してペンをおくことにします。

新事務局構成員

事務局長 渡部憲嗣 (32 獣医)

総務担当 加藤喜一 (42 酪農) 加藤 博 (45 酪農)

会計担当 尾形眞二 (39 獣医) 太田修一 (40 獣医)  
広報担当 楢崎秀夫 (33 獣医) 岩田寿雄 (39 獣医)  
名簿担当 野川浩正 (36 獣医) 近藤卓夫 (39 獣医)  
高鳥浩介 (45 獣医)

## 岐阜県支部の現況

岐阜県支部長・吉井 邦雄 (S39 酪農)

昭和40年に岐阜県に就職しましたが、当時、本県では多数の先輩たちが活躍しておられ、心強く感じたものでした。同窓会組織としては、東海支部という名称だったと思いますが、愛知、三重、岐阜の3県で毎年持ち回りで開催し、旧交を温めるという状況でした。

昭和60年代に入ると、今まで会の中心として活躍されておられた1～3期の方々も次々と現役を退かれ、平成になってからは同窓会を開くことができなくなりました。

3県の行事の都合もあって日程調整が難しく、以前のように会って話がしたいと思いつつも、次第に疎遠になっていきました。そして3県が別組織となりました。

岐阜県同窓生も年に一度は集まりたいということで、規約も作り、2期の松野繁雄さんを支部長に、平成9年に同窓会組織を立ち上げました。

平成11年には松野さんも高齢ということで支部長を勇退され、私が後を引き継ぎました。

県内には40人以上の卒業生がおられますが、半数の21名が会員になっています。

昨年は母校の創立60周年記念行事にも参加しましたが、帯広の街、駅、学校の変わりようには驚かされました。しかし、遠景で眺める日高山脈、十勝平野は昔のまま、なので、ほっとしたところです。

さて今年には岐阜県において、和牛の全国共進会が9月25日～30日にわたり飛騨の高山で開催されます。その受け入れ準備もあって現役の方々も忙しく、一年余り会を開いておりませんが、今年のうちには開きたいと思っています。和牛の全国共進会には、ぜひ、飛騨高山までお越しください。

## 大阪支部設立のお知らせ

金谷 一夫



平成13年4月8日(日)午後3時、JR福島駅前の“吾作どん”にて、大橋進氏(S38 卒)、甘利靖男氏

(S42卒)の努力の結果、支部が結成されました。しかし、ここで選出された支部長が困った事には、同窓会名簿に名前が無い男、31年入学33年除籍という金谷一夫です。本部も代議員の方々もかなり困りましたが、帯広畜産大学60周年記念祭には出席を認められました。“60年来の念願だった”ともものすごく喜んで下さった22年帯広農専卒、29年畜大卒の磯沢敏弘様、又親子で畜大を卒業された、19年帯広高等獣医卒の第一期生井上定幸さんが48年卒の井上凡己さんを連れて親子で出席され、“よく作ってくれた”と喜んでくださった。40年前、兵庫県出身者を中心として大阪出身者も交えて関西人会と云う名で、スズランが咲き、カッコーの声を聞きながら売買川のほとりをさまよった仲間の繋を作った下さった大先輩の夢を立派につないでいきます。

人の出会いはこの世の道標と云はれますが、この出会いがあつての”邂逅”人生で一番楽しいのは邂逅でしょう。

今年も11月に楽しい時間を持つことにしています。帯広畜産大学大阪支部を末長く愛して楽しい集いになることを望んで皆様にお知らせいたします。



写真 27. 大阪支部-2

## 兵庫県支部の紹介

兵庫県支部幹事・長谷川 隆一 (S53 獣医)

平成14年度の兵庫県支部総会を、平成14年7月27日(土)に神戸市で開催しました。総会は、長年支部の顧問であった大杉栄一先生が6月に急死されたため、先生のご冥福を祈る黙祷から始めさせていただきました。

当日は、顧問である藤野先生を始め、同窓生20名が集まり、総会後の懇親会では、帯広の思い出話に花が咲きました。

また、昨年発生したBSEに関係した方々も多く、当時徹夜が続いたこと等、苦労話が続きました。

兵庫県支部も、このような同窓会を始めて20年近くなりますが、同窓生も年々歳を重ね、昔のように酒を飲み尽くし、幹事をあわてさせるようなこともなく、少し寂しい感じがしています。

幹事としては、もう少し若い方も出席して、少くからい羽目を外すような元気な同窓会にしていきたいと思っております。

兵庫県に在住、又は勤務された方は、どうか幹事までご連絡をお願いします。

## 鳥取県支部の現況

鳥取県支部長・朽木 広 (S23 獣医)

平成14年3月16日倉吉市上井町、ホテルセントパレス倉吉プライダル館で畜大同窓会を開催しました。出席

者は、1期生の田中修氏、朽木、笹原浩三氏 (S41 総農、鳥取大学農学部教授)、福本幸久氏 (S46V、開業支部幹事長)、小谷道子氏 (H6V 県畜産課、旧姓多田)、藤田恵子氏 (H9V 米子家畜保健衛生所) でした。

福本氏から、畜大創立60周年記念事業に支部代表として出席した状況や、県獣産業動物幹事としての活躍状況が報告されました。

笹原先生からは、「海外旅行ハプニング対策」として体験から得た

1. フライトの再確認とキャンセルに伴うトラブル
2. 出てこない荷物に焦る、その対策
3. スリに遭遇した経験、その手口と対策
4. 両替のハプニング などの紹介がありました。

私は卒業後一貫して公衆衛生に従事していましたので、最近の牛海綿状脳症とそれに伴ううそつき食品には関心があり、帯広畜産大学の名前が報道されるたびに我が事のように嬉しくなります。広島での日本獣医師会学会年次大会の特別シンポジウム、「牛海綿状脳症と獣医公衆衛生」の演者・石黒直隆氏(帯広畜産大助教授)の講演に、久しぶりに酔いました。母校と同窓会の発展を祈ってやみません。



鳥取支部同窓会にて

## 写真で見る母校



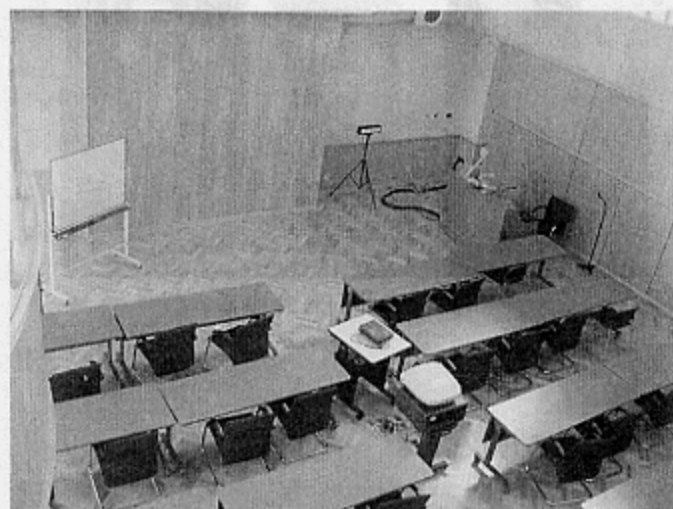
事務局本部棟



講 堂



新装なった原虫病研究センター玄関



センター内のP-Kホール



センター内中庭

## 事務局庶務事業報告および計画

高橋英三 (S50 酪農)、辻修 (S53 工学)、  
小嶋道之 (S55 農化)

### 平成 13 年度事業報告

- 平成 13 年 10 月 18 日 3 年次編入学および大学院合格者へ協賛金納入願いを発送  
 12 月 14 日 第 1 回役員会 (新・旧役員) 松竹  
 12 月 16 日 学部推薦入学・合格者に協賛金納入願いを発送  
 12 月 20 日 別科推薦入学者に協賛金納入願いを発送  
 12 月 25 日 畜大便りを各支部へ発送

- 平成 14 年 2 月 4 日 推薦入学・、大学院、帰国子女および社会人特別選抜合格者へ協賛金納入願いを発送  
 3 月 4 日 第 2 回役員・学内代議員会 (新・旧役員)  
 3 月 6 日 学部前期および別科合格者へ協賛金納入願いを発送  
 3 月 11 日 卒業および修了予定者に終身会費納入願いを配布  
 3 月 20 日 卒業式 (同窓会長祝辞)  
 3 月 23 日 学部後期合格者へ協賛金納入願いを発送  
 4 月 25 日 釧路支部へ副会長推薦の依頼文書発送  
 5 月 1 日 畜大便りを各支部へ発送  
 7 月 5 日 第 1 回代議員会  
 8 月下旬 畜大便りを各支部へ発送  
 9 月下旬 同窓会報の発送



地域共同研究センター



ピオトープ



ピオトープに咲く花



## 平成 14 年度事業計画 (案)

- 平成 14 年 10 月中旬 3 年次編入学および大学院合格者へ協賛金納入願いを発送
- 11 月下旬 平成 14 年版同窓会名簿の発送
- 12 月上旬 第 1 回役員会
- 12 月中旬 別科推薦入学および学部推薦入学・合格者に協賛金納入願いを発送
- 12 月下旬 畜大便りを各支部へ発送

- 平成 15 年 2 月上旬 推薦入学・、大学院、帰国子女および社会人特別選抜合格者へ協賛金納入願いを発送

- 3 月上旬 学部前期および別科合格者へ協賛金納入願いを発送
- 3 月中旬 卒業および修了予定者に終身会費納入願いを配布
- 3 月 20 日 卒業式 (会長祝辞)
- 3 月下旬 学部後期合格者へ協賛金納入願いを発送
- 4 月中旬 畜大便りを各支部へ発送
- 6 月上旬 第 2 回役員会
- 7 月中旬 第 1 回代議員会
- 8 月下旬 畜大便りを各支部へ発送
- 9 月下旬 同窓会報の発送

事務局会計報告および予算  
帯広畜産大学同窓会平成12年度決算報告書

(平成12年10月1日～平成13年9月30日)

[ 通常会計 ]

収入の部

項 目	H12 予算額	H12 決算額	増 減	備 考
前年度繰越金	5,605,131	5,605,131	0	
名簿販売	1,500,000	1,717,000	217,000	503部 x 3000円 : 広告7件 208,000円
協賛金・終身会費	4,500,000	4,930,000	430,000	212人 x 20,000円 (協賛) : 69人 x 10,000円 (終身)
雑収入	5,000	19,179	14,179	寄付 16,000円 : 普通貯金利子 3,179円
合 計	11,610,131	12,271,310	661,179	

支出の部

項 目	H12 予算額	H12 決算額	増 減	備 考
印刷代	4,500,000	4,494,334	5,666	名簿1000部、会報2回、封筒
大学後援経費	4,000	300,000	100,000	学术交流支援20万円、後援会賛助会費10万円
通信、郵送料	1,500,000	1,778,937	△ 278,937	名簿、会報の発送、料金受取人払
人件費	400,000	314,200	85,800	名簿整理、封筒発送の手伝い
振替手数料	70,000	133,640	△ 63,640	名簿、協賛会、終身会費等振込料金、別納料金
事務費	100,000	31,133	68,867	事務用品、コピー代
会議費	200,000	96,740	103,260	事務局会議、役員会
交通費	200,000	43,920	156,080	会議旅費
役員手当	150,000	140,000	10,000	14人
記念品代	200,000	204,750	△ 4,750	協賛金納入者(キーホルダー180個)
二重払い払戻し	50,000	30,000	20,000	終身会費3人
予備費	3,820,131	21,000	3,799,131	同窓会ホームページデザイン料
雑費	20,000	8,199	11,801	弔電4件
合 計	11,610,131	7,596,853	4,013,278	次年度繰越金 : 4,674,457円

[ 特別会計 ]

収入の部

項 目	H12 予算額	H12 決算額	増 減	備 考
前年度繰越金	15,000,402	15,000,402	0	定額貯金+郵便貯金+貯蓄型養老保険
貯金利子	0	2,076,000	2,076,000	郵便貯金満期
合 計	15,000,402	17,076,402	2,076,000	

支出の部

項 目	H12 予算額	H12 決算額	増 減	備 考
	0	0	0	
合 計	0	0	0	

平成12年度監査報告(平成12年10月1日～平成13年9月30日)

帯広畜産大学同窓会の上記期間の監査を実施しましたが、適切に処理されていることを認めます。

平成13年10月1日

監事 蒔田 久平 印  
石橋 憲一 印

帯広畜産大学同窓会事務局  
〒080-8555 帯広市稲田町西2線11番地  
畜産学部病態獣医学講座  
TEL: 0155-49-5365  
FAX: 0155-49-5369